教員紹介

人間のこころの発達を研究

ご自身の研究や教育観などを語っていただく「教員紹介」の第３回は、人間文化創成科学研究科先端融合部門先端融合系の菅原ますみ先生にお話を伺います。

菅原先生は発達心理学を専門にしておられ、特に、人間のパーソナリティの発達に着目した研究をなされています。インタビューでは、そのおもしろさや奥深さを語っていただきました。

Masumi Sugawara
菅原 ますみ

人間の行動って、十人十色、いろいろなふるまい方があって、その人らしさというのが必ずあるんです。

先生のご専門は？

私は発達心理学を専門にしているんですが、とくに、人間のパーソナリティの発達に関心をもって研究しています。人間の行動って、十人十色、いろいろなふるまい方があって、その人らしさというのが必ずあるんですね。その人らしさ、ユニークさというのは、実は、生まれたときからあるものなんですよ。もちろんそれは、人が成長するにしたがって変わってもいきます。そのときの最大の要因は環境です。個性と環境の出会い（マッチング）が人間に何をもたらすのか、もっと言いますと、人間が幸せになるような個性と環境の出会いはどういうものなのか、あるいは不幸にならないような出会いとはどういうものなのか、を考えているんです。

というのは、私はお茶大に来る前は、厚生労働省技官として精神保健研究所で働いていました。家族や地域の環境とメンタルヘルスを考える職場です。私がとくに力を入れていたのは（今もいれているのですが）、子どものパーソナリティとメンタルヘルスとの関連です。心理学では、子ども期というのは、０歳から１８歳くらいまでを言うのですが、たとえば、学校に行けない、というような不適応をどうすれば防ぐことができるのか、いろいろ考えるわけです。精神疾患の発症は、環境によって大きく左右されます。人間が精神的な問題で不幸にならないようにするためにはどうすればいいのか、どうしたらそれを防げるのか、それを考えることが私の研究なんです。

人間のこころの発達はほんとに不思議で面白い。人間が好きな人にとても向いている研究領域だと思います。

研究を志すきっかけは？

卒論で双子の発達過程をテーマとしてとりあげたんですね。そのとき、双子のみなさんにアンケート調査に協力してもらったのですが、そのアンケートを読むのがほんとうに興味深くって。というのは、たとえば、大人になってからの回答であるにもかかわらず、字の形や筆圧がそっくりなんですよ。そうすると、これはどこからきているんだろうって。発達心理学の領域は、いわば生物学的知見と社会学的知見のクロスする場所なんですね。人間には３０億対ものDNAがあって、そこに遺伝子が配列されているわけですが、どれほど人類の歴史が続いたとしても、まったく同一配列の遺伝子セットを持つ人間はいないと言われています。人類共通の部分はとても大きいのですが、配列に個人差があるんですね。その個人差によって個性が生まれてくるんです。ところが、双子の場合、その組み合わせが限りなく同じなんですよ。それなのに、成長の過程で、個々のパーソナリティは変わってくるでしょう？もともと持っている遺伝子が同じで同じ家庭のなかで育つことが多いのに、個性が違ってくるのはなぜなんだろう。本当に不思議だなって思いますが、ひとりひとりが別々に体験する環境の影響力が大きいのだろうと予想しています。

修士論文では、新生児をとりあげました。これまたおもしろいことに、生まれて３～４日目なのに、すでにその行動はとても個性豊かなんです。すごいでしょう。ずっとその子どもたちを追跡して、いま、一番年長の人たちが２０代になっています。生まれつきの個性を引き継いでいる部分と、成長にしたがって変わっていく部分があるんですが、やっぱり、一番重要なのは他の人とのかかわり、対人環境ですね。とくにね、親よりも、学校に行くようになってから出会う親友や友だち集団の影響がとても大きいことがわかってきています。

こうしてみると、発達心理学というのは、人の成長を追いかける学問だなあ、と思いますね。人間のこころの発達はほんとに不思議で奥深い。それを日々感じます。人間が好きな人にとても向いている研究領域だと思いますよ。

どんなキャリアを歩まれたのですか？

大学院を出たあと、ある短大の幼児教育科の助手として勤めました。いつもまわりに小さな子どもたちがいて、楽しくて、観察も出来るし一石二鳥（笑）。そのあと、厚生労働省の技官になりました。公務員なんですけど、これは研究職で研究所配属でした。ちなみに、公務員試験は受けなくていいんですよ（笑）。そのあと、お茶大に来たんです。

今はほかにＮＨＫと協力して、メディアと子どもについて研究したりもしています。ビデオやゲーム機、ＰＣなどのメディア環境が子どもたちの発達にどんな影響を与えるかを調査しています。幼児期・児童期・思春期というのは人間にとってとても重要な時期ですが、そのとき、どんな内容の情報がメディアから与えられるか、どのようにメディアと関わるか、はやはり子どもにすくなからず影響することが予想されます。また、大切なメディアとして忘れることができないのは、やはり本、幼い子どもだったら絵本なんです。とくに言葉の発達には活字メディアは大きく関わるようなんです。私のような研究領域ですと、たとえばメディアとの関わりのなかで子ども番組のプログラムに関わったり、子どものおもちゃや教材を開発したり、という方向に仕事の可能性が広がったりもします。

人間ってね、老人になっても変わることができるんですよ。すてきなことですよね。

私は大学院までずっと、東京都立大学（現・首都大学東京）だったんですね。ですから、お茶大に勤めたのははじめての女子大経験で、これまたとてもおもしろかったです。学生さんが女の子だけの気楽さか、みんなのびのびしていることもありますけど、もうひとつ、一つのキャンパスのなかに、小さい子どもから私より年上の学生や院生さんまで一緒にいるでしょう。自分よりずっと若い学生さんたちと一緒に、生き生きと学んでいるその人たちをみると、ほんとうに力づけられるし、よし、私もやるぞ！っていう気持ちになれますね。人間ってね、老人になっても変わることができるんですよ。すてきなことですよね。人間って生物としてほんとによくできているし、研究を通して知れば知るほど面白い。だからこそ、一人一人を大事にしたいってすごく思います。

人とコミュニケーションをとる方法って言葉だけじゃないでしょう。

学生時代やってよかったことは？

学生時代は、大学院もふくめて、ずっとオーケストラのサークルに入って、バイオリンを弾いてました。都立大の門を入ると、左に講義棟、右にオーケストラの部室があるんですけど、私はいつも右に行ってました（笑）。楽しかったですね。人とコミュニケーションをとる方法って、言葉だけじゃないでしょう。音の響きによっても人とかかわり、コミュニケーションをとることができるんです。なんて言うと、また研究の話になってしまいますけど、ほんとにムダなことは一つもないと思います。

それからね、私は旅行が好きなんですけど、とくにリゾートに興味があるんですよ。人がリラックスする環境って、どういうものかって。あと、私、カウチ・トラベルコーディネーターなんです。旅行に行くのはどういう人か、それにあわせて、旅行をセットするんです。バーチャルですけど。旅行に行く人たちによって、気持ちのいい環境って違うでしょう？あ、また研究の話になっちゃった（笑）。

お茶大生にひとことお願いします

とにかく、今みなさんがいる場所で、そこにいる人やそこで起こるできごとに一生懸命関わってみて下さい。人間は小さな子どもでも自分の環境を変えていく力があります。すぐには思い通りにならないこともたくさんあると思いますが、ひたむきな努力は必ずよい方向に環境を変えていくはずです。みなさんも私も幸運なことに、伝統あるお茶大が今の“自分たちの場所”です。お茶大が今よりもっと居心地のいい場所になるように、一緒にがんばりましょう。

ひたむきな努力は必ずよい方向に環境を変えていくはずです。